

## Lesson 1 「快適さ」は、本当に贅沢なのか？

---

一年を通して快適な環境で暮らしたい。でも、光熱費が心配。  
こんな声をよく耳にします。中には快適な環境で子育てをすると、もやしっ子ができてしまうから、多少不快な方が教育には良い、といった乱暴な意見もあるようです。健康的な室内環境を考える上で「快適さ」の持つ意味は重要です。

人間は生存に必要な環境を選択するために、視覚や聴覚、皮膚感覚といった感覚を持っています。いわゆる五感ですね。受容器で受けた環境刺激は脳で評価され、服を脱ぎ着したり、木陰に入ったり、暖房のスイッチを入れたり、生存のために行動を起こします。このような意味で、感覚は危険を察知するために人間に備わった機構、ということができるかもしれません。

「快適であるということは、自分の生存にとって安全だ」と自分が認識している状態である、と定義することができます。逆に「不快」な状況は、健康に対する危険信号であるとも言えます。室内気候を快適な状態に保つことは、食や衣と同様に健康を考える上で重要な要素であることは言うまでもありません。

近年の健康ブームで、健康食品をはじめとした様々な商品やサービスが注目を集めています。一方で暖冷房費を含む光熱費は逆進性が高いことが知られており、所得の伸びない現在の状況下では、光熱費を節約するためにエアコンをこまめに入り切りするなど、家計防衛の工夫がされています。

しかし、不快感が危険を知らせているのに行動を起こさず、体調を崩したり、最終的に病気になったりしたのは、本末転倒です。マクロの暖冷房費は、医療費や介護費といった社会保障費との関連性の中で議論されるべき、との主張も現代社会では徐々に合理性をもち始めています。

英国では光熱費が世帯収入の10%を超過する家庭を「Fuel Poverty」と定義して、貧困家庭の生活環境水準を向上させる運動が展開されています。光熱費を抑制しつつ、年間を通して快適な住環境を提供する。室内気候を提案・創造し

ている建築家や設備設計者、エネルギー供給業者とともに、需要家である消費者など、多くのステークホルダーが協力してこの目標を達成することが社会的に求められています。日本の現状はいかがでしょう？我慢は美德ですか？



(T-house : 写真提供 武部建設株式会社)

室内気候研究所 主席研究員  
工学博士 石戸谷 裕二

■公式 HP : <http://iwall.jp>